

# 「山古志 復興新ビジョン研究会」

## 第1回産業・経済再生分科会 議事概要

1.日 時 平成17年1月26日(水) 10:00~12:00

2.場 所 新潟ワシントンホテル 平安の間

### 3.議事概要

(1) 分科会座長挨拶(省略)

・新潟大学経済学部教授 西澤 輝泰

(2) 出席者紹介と配布資料の確認(省略)

(3) これまでの経過報告

第1回全体会議

・事務局より説明(資料-3)

第1回円卓会議

・事務局より説明(資料-4)

(4) 復興新ビジョンにおける分科会方針の検討

復興新ビジョンにおける基本方針

・事務局より説明

・意見交換

分科会における大きな方針の検討

・事務局より説明

・意見交換

(金子委員)

アンケートは、世帯の(家族)構成や回答者を把握しておきたい。

(熊谷委員)

帰村した人の生業や後継者について継続性の問題がある。山古志では鯉で生計を立てている世帯は少数派であり、鯉があるから産業は大丈夫とは一概には言えない。また、親鯉が生き残ったから大丈夫だというのが、今回の地すべりの後でも養鯉用の水が確保できるのかは現時点では論証されていない。

(西澤座長)

若い人が後継者として山古志に残るためには、鯉だけではなくほかの産業が必要なのではないか。畜産はどうか。

(樋口委員)

畜産の対象は肉牛だが、山古志の人とそれ以外の人が営んでいる畜産業とがある。

(高野委員)

長岡の肉牛が多く、山古志の人がやっているのはそれほど多くない。長岡の街中では飼育できないため、山古志の土地を借りているだけである。農業産出額は山古志村に計上されるが、実態は長岡市のものと考えられる。

(原委員)

山古志の場合、産業の復興は集落ごとに分けて考えざるを得ないと思う。集落ごとの産業の現状を把握したうえで、ビジョンを考える必要があるのではないかと。

(高野委員)

山古志村全体を十把一絡げに議論するのは無理だと思われる。まず、世代間(高齢者と若い人たち)では帰村に対する思いがかなり違ってきている。また、生業とする産業ごとに温度差がかなりある。収入の目途が立っている人たちと見通しが立たない人の違いを把握してビジョンを考える必要がある。

(事務局)

世代間や産業間の違いを考慮する必要はあるが、個別の案件にすべて応え、山古志を分断したビジョンを策定するのは無理だと考える。今回のビジョンの策定においては、共通項をどこに求めてもらえるのかを探し出すことがビジョンの骨格になる。

(高野委員)

きめ細かいプランは山古志の人たちをダメにするのではないかと。お節介を焼きすぎずに、山古志の人たちの自立心を支援する感覚が必要ではないかと。研究会では環境や場を提供するにとどめ、それを選ぶか選ばないかは山古志のみなさんに判断してもらうのがよい。

(西澤座長)

- ・ 8割～9割の人が帰村することを前提に考えるのは無理がある。戻る人が半分になっても、山村として生き延びていけるビジョンを示すのがいいのではないかと。
- ・ 山古志の規模では宿泊施設の維持は難しいが、これらの施設整備に対して支援をすることはできるのではないかと。人手の問題はあるが、やる気があったら支援することになるのではないかと。

(樋口委員)

- ・ 年末年始の帰省や親戚との関わりの中で、住民の意識が変わってきている。雪解け後にはまた考え方が変わってくると思われる。その点を推測したプランが立てられるか。
- ・ 山古志は癒しの空間として活用できると考えた。原風景として、県立公園の特定区域に指定するといった方法もあるのではないかと。
- ・ 人口の減少が予想されるが、山古志に戻りたい、住みたいと考えている人たちの受け入れも検討する必要がある。
- ・ 地震があった台湾では、自分たちの体験したことを踏まえた上で、エコミュージアムや宿泊業を生業として立ち上げている。この事例を参考に、最低限の制度的支援と整備を復興ビジョンに加えればよいのではないかと。
- ・ 「錦鯉」は海外でも通じる日本語で地域独特の文化である。世界にネットワークを持つ

資源であり、評価に値する。また、棚田の米は最高のブランド。これらの山古志ブランドを生かす。

- ・地域循環型ネットワークを行っている協同組合が、被災地の近くにロータリーの財団からの資金援助を受け、長岡ニュータウンのそばに 10ha の水田を整備する予定もある。

(事務局)

中山間地域の復興のヒントと仕組みを提案し、それが実行されれば、復興のモデルとなりうると考えている。今回、山古志で何を起こしうるか、住民が何をよしとするかを委員の皆様からご意見をいただきたい。そのとき、行政がどのような支援制度を持っていて、どのように読み替えられるかを検討していきたい。

(樋口委員)

山古志は 40 年くらい前によく開かれたと考えている。近代化も必要であるが、40 年くらい前の日本の原風景を文化的に維持していく方向が良いと思う。そのためには、国土交通省だけでなく文部科学省もこの地域のあり方をどのように考えるかを検討することが重要である。ひいては子供たちの教育にもつながる話である。山古志村に関する歴史的資料を集約すれば、日本の中山間地の歴史とふるさとを記録するミュージアムができると考えている。

(事務局)

おそらく山古志のみなさんは、各自の住宅や棚田の復興は考えているが公共施設の復興やミュージアムのあり方についてまでは考えていないと思われる。それらが、ビジョンに書き込まれ、それらに村民が寄与できるということであれば、外からの協力も得やすくなるのではないか。

(高野委員)

山古志には日本の原風景がありいいところだが、すべての地区がそうではない。観光に適しているところはそのまま保護し、それ以外の地域は IT や除雪等の最新技術などで住みやすい場所にしていく。そのような環境のギャップを上手くネットワークで繋げれば、観光客にも来てもらえるのではないか。東京から来た人に地域を案内する際には、山古志だけでなく、蓬平や川口町の梁など、周辺を含めたコースを回るのが現実的である。

(事務局)

この機会に、同じく被害を受けた市町村が連携して、そのようなコースを提案する方が、山古志が輝く可能性がある。

(西澤座長)

復興のカギは交流である。

(熊谷委員)

- ・山古志の人たちには今回の震災の被害・体験を全国にメッセージしてもらいたい。闘牛や農業に加えてそれらも生業にしてもらってはどうか。たとえば、教育や防災関係者の学習施設にもなりうる震災復興メモリアルの建設などが考えられる。
- ・今回の震災によって山古志はブランド化したと思われるので、それを生かしていく。また、山古志の地域資源が何かを探るのは必要なことで、地元の人が気づいていない資

源・ルートを提案する。その核施設として復興メモリアルを整備し、人が立ち寄れる施設を併設してはどうか。グリーンツーリズムなどに波及する可能性がある。

- ・農業と養鯉、闘牛、風景、人を組み合わせ、人に来ていただく新たな産業を提案し、やる気のある方にまずは自力でやっていただく。支援が必要であれば国や県が支援するというのがよいのではないか。

(事務局)

今までいただいた新しい提案がビジョンの核になるが、急激な変化に山古志が対応できずダメになる可能性もあるのではないか。山古志で当たり前前に生きていることに価値があり、それを少しだけ外に向けて開放してほしいと考えている。

(西澤座長)

ルートの中に山古志を組み込んでも、山古志にお金を落としてもらう仕組みが必要ではないか。若い人の定着を促すためには収入の道がないと難しい。

(原委員)

- ・長岡に通動できるインフラ整備を行えば、山古志の産業には直接携わらなくても定着人口はある程度見込めるのではないか。
- ・国内だけでなく、東アジアの中山間部も対象にした人づくり支援を行う。国際的に PR し評価されることで、山古志の人々も自信が湧くのではないか。

(金子委員)

観光をさらに打ち出すのが産業復興の基本的な方針だと思う。そのためには鯉も棚田も維持する必要がある。個人で農業をされている方が多いが、この機に法人や組合といった形態に移行してはどうか。東頸城の農業特区は一定の成果を上げているようであり、事業の継続性が高まるのではないか。

(高野委員)

長期的に農業のあり方を考えてもらうためには、まず村民にアジアを含め外遊をしてもらい周りの状況を把握してもらうといった場を提供し、村民自信に理解してもらうことも重要ではないか。そうしたことも大切な支援になる。

(事務局)

復興新ビジョン研究会では、多くの可能性を示唆し、「気づき」の機会を提供する。そして、復興メニューは示すが、どれを採るかは村民の判断に委ねる方向で考えてみたい。ただし、帰村プロセス(安全性、基盤整備等)についてはビジョンで示す必要があると考えている。

(高野委員)

自分たちの良さに自分たちで気づくことが大事である。また、良さに気づき、それを行動に移せる人材を育てることが大切。人材を育てるための基金をつくってもよいのではないか。

(熊谷委員)

行政の方向は、地域自らが事業の効果を予測し評価する「自己提案型」に移っていくと考えている。ただし、いきなり山古志の人たち自身でアイデアを出してもらうのは難しいと思うので、生業についてはビジョンでメニューを示す。その中からプロ(住民)

が自分で考えて、できそうなことに手を挙げるということになるのではないか。

(樋口委員)

台湾の先進事例は大いに参考にすべき。地震後の台風でさらに被害が増しているにもかかわらず、復興活動を続けている姿には学ぶべきところが多い。人材育成の面でも台湾とのつながりは強化していくべきである。光り輝く山古志の実現のためにも、中越地域の発展のためにも、市町村のリンケージが必要。ブランドとなった山古志は生かすべきで、山古志の方向性と村人のエネルギーを生かすことで、山古志が生き返ってくるのではないか。

(高野委員)

山古志村民に長岡ニュータウンの空いている場所を提供するという選択肢を提供してもいいのではないか。再移転と称して何回も動かすのは望ましくないのではないか。

(西澤座長)

再移転については、前回の円卓会議で青木企画課長がおっしゃっていたように、復興の現場を見てもらうという意味もあって、仮設住宅を延長する場合には山古志に移したいということだと思う。

(熊谷委員)

現地に住んでみないと、なにを復旧できるか、どこまでできるか分からない。しかし、現地には全員が行けるわけではない。そこで、仮設住宅を山古志の地区内に設置し、そこを起点として、現場を見てもらい自身で再建意志や安全性、社会基盤の整備を確認してもらおう。このように、2、3年間の確認期間を経て自己リスクで住居を再建してもらおうことだと理解している。

(事務局)

今までは効率一辺倒で整備してきたが、今回はそうではない。市場経済優先ではなく、中山間地域にふさわしいやり方があるはずである。

(樋口委員)

住宅再建は今後大きな影響を及ぼす。メーカーの協力を仰いで、耐震構造のコンペを開催し、山古志でモデルハウスを作ってもらってはどうか。さらに、周辺の市町村とのリンケージには道路だけでなく鉄道も必要な要素。JRが今後この地域をどのように考えているのかも考慮する必要がある。

(原委員)

住宅展示会を山古志で行って、その後安く払い下げてもらうことは可能ではないか。

(金子委員)

当分科会では産業のあり方をまず議論し、産業活動を行う上でどのような住宅を整備して行くべきかを生活分科会に伝えるようにすべきではないか。

(5) 今後のスケジュールについて

・事務局より説明(資料-7)

閉会

(文責：事務局山口)